

自分らしさを大切にできる明るい未来をめざして

一宮西部小・6 鈴木 華奈

私がこの本を読んだきっかけは、本の帯に、「人たちがうだけで処刑された人達がいた。」と書かれていたのを見て不思議に思ったからです。

この物語では、ふつうとちがう子供の例として自閉症の女の子アディを取り上げています。アディには、こんな特ちょうがあります。整った字を書くことが苦手。光や音、さわられることにびんかん。人の表情を読み取るのが苦手。感受性が強く、一度不安定になると、立て直すのに時間がかかります。一方で、好きなことには、とことん夢中になります。

私はこの本で、三つの出来事が気になりました。

一つ目は、昔メアリーとジーンという何もしないのに、ただ変わっているというだけで魔女にされ、一方的に命をうばわれた女の人がいきました。きちんと理解されないことはひどいし、おそろしいことだと思いました。

二つ目は、アディへのいじめが書かれていることです。本が好きで知識が豊富なアディをねたんだエミリーが、アディの一番のお気に入り宝物「類語辞典」を切りさいたのです。しかも、「知恵おくれ」と一言言われたくない言葉だけを書き残して。どんな人にもいじめは絶対に許されないし、いじめを見ていた周りの人だって許されないのです。もし自分が同じ事をされたらやり返しても許せな

いくらい怒れると思います。

三つ目は、アディが村の委員会に何度否定されても、魔女の慰霊碑を作ることをお願いしたことです。魔女の慰霊碑は、アディにとって謝罪の気持ちを表す象ちょうでした。どんなに昔のことであっても、間違ったことをしたら、謝らないといけません。正しいと思うことは、何度否定されたとしても、あきらめずに伝え続けるべきだと教わりました。くじけないアディの強さに感心しました。

この本を読む前は、自閉症は特別なもので、自分とはかけはなれた病気だと思っていたけど、好きなことに夢中になるところは、共感できるし、アディの好きなサメの本ならいくらでも見られる集中力に尊敬しました。

この本を読んで、この世にはだれ一人として同じ人なんていない、人たちがうことは、はずかしいと思う必要なんてないと思うようになりました。もっと一人一人が、自分らしさをさらけだして、興味のあること、得意なこと、苦手なことをおたがいに深く知っていくことが大切だと分かりました。そのためには、安心して自分をさらけ出せる周りの温かい理解が必要です。例えば、きらいな食べ物も、好きな味付けで食べられるようになったり、左利き用のハサミが発明されたりするように、だれもが生活しやすくなるように環境を整えることが必要です。

一人一人が相手を理解しようと努めることで、子供達の表情が生き生きとし、明るい未来につながると 생각합니다。